

平成 23 年度 第 2 回 JICA 自然災害からの復興計画研修 - JICA Recovery Planning From Natural Disasters -



最終日JICA兵庫にて

技術研修期間：平成 24 年 1 月 16 日～2 月 24 日（6 週間）

研 修 場 所：神戸市/小千谷市・長岡市（新潟県）/東京都/仙台市・石巻市・名取市（宮城県）

研 修 内 容：神戸における阪神・淡路大震災後の復興プロセス・ノウハウを学ぶ講義/視察

参加研修員：11ヶ国 16名（バングラデシュ 2、中国 2、コロンビア 2、エジプト 1、フィジー 2、インド 1、パキスタン 1、パプアニューギニア 1、ペルー 1、トルコ 2、メキシコ 1）

当財団では、独立行政法人国際協力機構(JICA)からの委託を受け、「自然災害からの復興計画」研修を(財)神戸都市問題研究所と協力して実施しました。本年は自国で災害復興計画策定に携わる中央ならびに地方政府の行政官や学術研究者を 11 か国から迎え、6 週間の研修を行いました。研修の修了前には神戸市長を表敬訪問し、市長から長期の研修に対するねぎらいと励ましの言葉をいただきました。

研修を通じて研修員たちは、阪神・淡路大震災から復興を遂げた神戸市の取り組みについて、市の復興計画の策定や推進など、復興への取り組みについて幅広く学びました。行政のみが計画の策定・執行を取り仕切るのではなく、地域住民や事業者と協働して歩んできた神戸市の取り組みを学ぶため、水道や神戸港などの復旧・復興、経済復興や生活再建などを学ぶ中で、復興の推進力となった地域における人と人とのつながり・絆の重要性を説いた「ソーシャルキャピタル」の概念や、その具体的な取り組みについても学びました。講義・視察においては、考え方だけでなく、実践にかかわる内容について学ぶために、震災後に復興に携わった神戸市職員や、学識経験者、地域住民の方々を講師として迎え、経験に基づいた具体的なお話しをしていただきました。

一方で、今年で 4 度目の訪問となる小千谷市・長岡市（新潟県）・東京に加え、2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災の被災地である仙台市・石巻市・名取市（宮城県）を訪れました。視察先では、復興計画の行政担当者、復興にかかわった NPO、さらには阪神・淡路大震災当時の国の幹部の皆様から説明を受けました。視察を通じて、研修員たちは神戸市の被災や復興の取り組みの特長を理解したようです。



～研修を振り返って～

昨年は、地震に加えて世界各地で洪水などの大規模な自然災害が起こり、世界中の人々が気候変動のもたらす影響を実感した一年でした。本年度参加の研修員たちの中には、近年発生した災害からの復興過程にある国から来た人々もいました。また、研修員たちの母国の大半は、中央政府が中心となり災害対策をはじめとした政策を進めています。住民の力と共に地域を復興させていくという神戸の取り組みは、これから母国をさらに発展させていかなければいけないという使命を担った研修員たちすべてにとって、非常に新鮮であったようです。



長田区野田北部地域の視察

研修前半では、震災直後の危機対応や、復興計画の策定・実行過程について学びました。一日、一刻も早く計画の策定が望まれる中で、行政だけではなく住民を巻き込んで復興計画を策定する意義を認識し、多くの関係者と時間をかけて議論を尽くす際に生じたジレンマについて、研修員たちは非常に興味深く感じ取ったようでした。講義では、研修員たちが活発に質問を行い、講師の方もそれぞれの質問について丁寧に回答するというように、研修中は常に充実した熱のこもった講義がおこなわれました。

研修中盤以降は、行政以外の組織が復興に果たした役割についても学びました。神戸市内の各地で実際に復興まちづくりにたずさわった住民の方々や NPO などの組織を訪問して、当時、まちづくりコンサルタントを仲介として住民と行政との対話により進められた復興まちづくりの取り組みなどの説明を受けることで、研修開始当初から質問が多かった行政以外の組織が復興において果たした役割について理解を深めることができました。また、住民役、行政役、まちづくりコンサルタント役など、研修員自身が実際にまちづくりに関わる様々な役割になりきるロールプレイに挑戦した際には、住民と行政が力を合わせて行う過程で発生するであろう困難を実感しました。



六甲道の視察



ワークショップの様子

本研修では、研修員たちが受動的に講義を受けるだけでなく、主体的に研修に取り組んでもらえるよう工夫しました。1月20日に行われた『第5回災害対策セミナー in 神戸』では研修員による自国の災害について発表を行い、また、研修員自ら考え、ともに学ぶための研修手法としてワークショップを採用し、研修中に5回行いました。研修中盤以降では、本研修の集大成として、将来自国で発生が想定される災害に備えるための事前復興計画を国別で作成に取り組みました。それぞれの過程で、出身国に関係なく研修員間で助け合う場面が多く見られました。最終日に行われた各国の事前復興計画の発表内容はいずれも研修の成果を反映した素晴らしいものでした。

最後になりましたが、本研修を行うにあたってご尽力いただいた講師の方々に厚くお礼申し上げます。特に、仙台市・石巻市・名取市視察では、それぞれ復興の実務でお忙しくされているにもかかわらず、各自治体の復興計画を説明いただいた担当者みなさまに対して、研修の受け入れをお願いした私たち運営側はもちろんのこと、研修員たちもたいへん感銘を受けておりました。



石巻市の視察 日和山にて

石巻市での講義終了後、研修員の一人が立ち上がり、他の研修員へ次のように呼びかけました。「みなさん、おわかりでしょうか。日本でお金を使うなら、他のどこでもなく、今、ここ（被災地）で使うべきです。たくさん買い物をして、たくさん食べましょう！」実際に現地を訪れた上で、被災者の方々を助けるために自分にできることを考え実行しようとする研修員たちの姿は、とても印象的でした。同時に、お話しいただいた復興計画が一日も早く実現することを心より願いました。



母国に帰ると休む間もなく自国で被災地域の復旧・復興に取り組まなければいけない研修員、また、社会経済的背景や文化、制度のちがいのために、学んだ内容を母国で自身の所属する組織に説明、適用するのに苦労する研修員もいると想像します。多忙な毎日でも、自国と神戸市の状況や制度の違いを乗り越えて、神戸で学んだことを少しでも自国の復旧・復興の取り組みに活かすために奮闘する彼ら/彼女らに、日本から大きなエールを送りたいと思います。

研修担当：山田 かおり

委託元機関：独立行政法人国際協力機構(JICA)兵庫国際センター

研修協力機関：財団法人 神戸都市問題研究所

講義／視察先：神戸大学/政策研究大学院大学/兵庫県立大学/同志社大学/神戸学院大学/
舞子高等学校

神戸市水道局/神戸市保健福祉局/神戸市産業振興局/神戸市都市計画総局/神戸市都市整備公社/神戸市危機管理室/神戸市消防局/長岡市地域振興戦略部/仙台市震災復興本部/石巻市復興対策室/石巻市企画部/名取市復興部/神戸防災技術者の会(K-TEC)/神戸港振興協会/神戸住宅供給公社/すまいるネット/(財)建設工学研究所/(社)中越防災安全推進機構/わかとち未来会議(新潟県小千谷市)/六甲道駅北地区まちづくり連合協議会/六甲道駅南地区まちづくり連合協議会/ウェルブ六甲道1番街事業者の会/旧居留地連絡協議会/神戸諏訪山ふれあいのまちづくり協議会/北野ふれあいのまちづくり協議会/こうべ小学校施設開放委員会

関西電力(株)/まちづくり株式会社コー・プラン/新長田まちづくり(株)/(株)地域問題研究所/野田北ふるさとネット/コミュニティ・サポートセンター神戸/たかとりコミュニティセンター

【順不同、敬称略】



～研修員の声『神戸を訪れて（要約）』～
Participant's Voice 『VISIT TO KOBE』



国名：コロンビア
名前：Ms. Paula SIERRA VELEZ
所属：国家調整基金* 地域管理部



This is the first time I visit Kobe, as a matter of fact, is the first time I ever set foot on Asia! For a Colombian, who does not speak a word of Japanese, I imagined it was going to be extremely hard to get by in this city, however I was pleasantly surprised by how welcoming people are and how hand gestures and a smile can get you anywhere you want.

Compare to any other place I ever visited, people in Kobe are by far the most collaborative people, their generosity and warmth were what impressed me the most during my seven week visit. Let me illustrate for a minute with a simple example: picture the entrance of a train station during peak hour, imagine a sea of people who are all in a hurry knowing that it is not acceptable to be late to an appointment by even a fraction of a second (and they always seem to have an appointment). Now, imagine a foreign looking woman stopping one of those people to ask where she can find a restaurant or a drug store, or anything else you can think of. People not only stop but attempt to speak English, which fails 99% of the times, then patiently try to explain using gestures, and then, almost every time, they end up walking her up to the door of whatever place it is she is looking for (I wonder how they still manage to get to their appointments on time).

The above is just an exampl. Having experienced their kindness, it did not come as a surprise to learn, during the Recovery from Natural Disasters JICA course, the various ways in which people behaved during the aftermath of the 1995 earth quake and were able to survive, overcome hardships and recover by mutually supporting each other.

Once I leave, I will miss the tidiness of the city, the punctuality embedded in even the simplest task, the delicious food, the organization...but what I will miss the most are the people from Kobe, even those whom I never met!

今回、神戸に初めて訪れました、実をいうと、アジアに来るのが初めてなのです。コロンビア人で、一言も日本語をしゃべることができませんし、神戸市で生きのびることは困難を極めると想像していました。しかしながら、人々の素晴らしい歓待の心と、手ぶりや笑顔は私をいつでも望みの場所に連れて行ってくれました。

今まで自分が訪れたどの場所に比べても、神戸の人は群を抜いてとって協力的な人々で、みなさんの寛容さやあたたかさには、7週間の滞在の中で一番感銘を受けました。簡単な例で少し説明させてください。ラッシュ時の駅の改札を思い浮かべてみてください。ほんの一瞬でも約束に遅れることは許されないことと考え(そしてみんな約束があるように見えます)急いでいる人の海を想像してください。次に外国人のように見える女性が、その一人を呼びとめて食事処や薬局などをたずねている姿を想像してください。人々は立ち止まるだけでなく、英語を話そうとし、99%はうまくいきませんが、手ぶりを使って辛抱強く説明しようします。最終的にはほとんど毎回、探している場所のドアまで彼女を歩いて連れていってくれます(私はみなさんがどのようにして約束に遅れないですんでいるかが気になりなところですが)。

以上書いたことは一例にすぎません。外国人の滞在を心地よいものとするため、みなさんは本当に尽くしてくれます。みなさんのやさしさにふれ、今回のJICA研修で学んだ1995年の大惨事後のみなさんの活躍も、もっともだと思いました。

日本を去るとなれば、整然とした街、ちょっとした事にさえ時間に正確であること、おいしい料理、さまざまな団体のことなど、恋しく思うでしょう。…しかし、一番恋しく思うのは、まだ出会ったことがない人もふくめて神戸に住むみなさんのことです。





国名：パキスタン
 名前：Mr. Saleem Shahzad MALIK
 所属：国家防災局災害対策部



Tik,Tik,Tik,.....5:46 am, 17th January, 1995.....A great earthquake magnitude 7.3 hits the Kobe, city. There is hue and cry all around. Buildings have collapsed. A thick cloud of smoke has covered the sky as fire has erupted a number of places. Communication infrastructure is toppled. Kobe port is destroyed to a grave extent. A large number of people have either died or are stuck up under the debris..... Time goes on.....

7:46 am, 9th January, 2012.....Kobe is worth seeing. The lush green Rokko Mountains are laying its arms towards Pacific Ocean. The splendid Kobe Port Tower is blooming. The fabulous Iron Man is exhibiting mettle determination of Kobe city people. The Kobe Skyscrapers are whispering the clouds. The magnificent Akashi-Kaikyo suspension bridge, world's longest, is telling tale of High-Tech Japan. Above all, the kind, hospitable and meek people of Kobe city are taking such care of the visitors, as if they are flowers. The world's best railway system consisting of Hanshin Railway, JR Railway, Shinkansen (the bullet train), is ready to commute the tourists to their destinations, regardless of extreme weather.

I am one of the lucky JICA participants to be in Kobe from 9th January, 2012 to 25th February, 2012. I am leaving the model Kobe city with heavy heart but with sweet memories.

チクタク、チクタク、.....1995年1月17日午前5:46.....。マグニチュード7.3の大地震が神戸市を襲った。いたるところで泣き叫ぶ声が聞こえた。建物は倒壊し、いくつもの地域で火が発生し、厚い煙の雲が空を覆った。通信インフラも倒壊した。多くの人々が亡くなり、生き延びていても瓦礫の下で身動きがとれないでいた。時は過ぎていく.....。

2012年1月9日午前7:46.....。神戸は一見に値する。緑豊かな六甲山は、太平洋におかって腕を伸ばしており、光り輝く神戸ポートタワーは美しい。巨大な鉄人は、神戸市の人々の勇壮な決意を体現している。神戸の摩天楼は雲にささやかんばかりだ。世界一長い壮大な明石海峡大橋は、高い技術を誇る日本を物語っている。何をおいても、親切でホスピタリティにあふれ、柔和な神戸市の人々は、まるで花々のように訪問者たちをもてなしてくれる。阪神電車、JR、新幹線などからなる世界の鉄道システムは、どれほど過酷な天候であっても、観光客をそれぞれの目的地に運ぶ用意が常にできている。

私は、2012年1月9日から2012年2月25日まで神戸市に来ることができた運のよいJICA研修参加者の一人である。神戸を後にするのは寂しいですが、あたたかい思い出とともに去ることが出来ます。

